ながらへてかひなき身をもたらちめの
あととふけふぞ思ひなぐさむ

こうして生きながらえて、お母さんのためにおつとめをすることができると思うと、わずかに心がなぐさめられるようだ、という意味ですが、このころの歌人で母親に直接ふれてよんだ歌はめずらしく、兼載の母思いの姿がみられるようです。

そのころ、会津を支配していた芦名氏は、盛信の死後、その子盛詮、盛高の時代をむかえて、家臣の間で争いが絶えず、各地でさまざまな反乱が続いていました。

文亀二年（一五〇二年）、兼載が会津入りをしたころは、芦名家中の争いがますますはげしくなっていったころでした。そして、永正二年（一五〇五年）には、領主芦名盛高とその子盛滋の、父と子の対立がおこり、内乱状態にまで発